演說講演說教法

264
161

特19
870

井口彌壽男著

演說講演說教法

東京　內外出版協會

明治
43. 7. 28
內交

序

本書は曾て青年の集會に於て著者がなせる講演の草稿なり、多年研究の結果といふ程のものにもあらず、經驗上實用に適すべく思はるゝ節々を、思ひ出したる儘記述したるのみ也。各地青年團體勃興に伴ひて演說講演の重んぜらるゝ折柄、本書の盡すべき領分もあらんかと、茲に公刊することゝなしぬ、初心者に手解ともならば幸なり。

明治四十三年七月

著者識

目次

第一章　概說……一
第一　演說の必要……一
第二　雄辯とは何ぞ……三
第三　練習の必要……七
第二章　準備……一一
第一　間接準備……一二
第二　直接準備……一五
(一)　趣旨と演題……一七
(二)　材料の蒐集……二三
(三)　演說の組織……三四
イ、緒論……三六

とき、如何に敵の心膽を寒からしめ、味方の勇氣を增すべきかは、實戰の經驗ない者でも想像するに難くない。併し是だけでは勝敗は決しない。其響きは之を大砲のに比べると豆鐵砲ほどしかないけれど、歩兵の小銃戰でなくては勝敗は定まらない。進んでは白兵戰でなくては最後の勝利は占められない。一發て以て數十百人を死傷せしむる巨砲に比べると何でもない樣だが、實際數量の上から何の價値もないのだが、最後の勝利は白兵戰で取得せられる。

演說は白兵戰である。文章に比して劣り優りのある。ものでない。相賴り相助けて行くべきもので、鳥にすれば兩翼、車にすれば兩輪である。だから文章を練習すると同じ樣に辯論の稽古もある筈であるが、今日の實際は如何であるか、普通敎育の中に文章と並びて敎へて居るか、吾人の寡聞なるためか、未だ之を聞かない。玆には敎育を論ずる遑がないから普通敎育に之を加ふるか如何か、此問題は別として、少くとも吾等は個人として各自此點に注意を拂はねばならぬ。

第二　雄辯とは何ぞ

話し方を練習するとすれば、雄辯を以て目的とせねばならぬ。そこで如何なのが雄辯かを知る必要があらう。さて如何なのが雄辯か、吾人は學者の說を引用するの煩を避けて直ちに自分の考を述べて見たい。

吾人の考ふる所では所謂懸河の辯必ずしも雄辯でない。措辭の妙到れり盡せりて、修辭法語法の上から寸分の缺點が無いとしても、必ずしも雄辯ではない。聽衆が賞讃して「彼は實に雄辯家だ」といふ位ならば、未だ以て眞の雄辯家とするには足りない。聽衆をして巧拙を考ふる遑なからしめよ。演者の心が聽衆の心となり、演者激して聽衆激し、演者笑ッ

て聽衆亦笑ふに至れば稍雄辯に近しと謂はねばならぬ。此場合には聽衆は演者の巧拙を考ふる遑はないのだ。譬へて見れば方法の巧拙が眼に映ずる位ては、色硝子の樣なもので、目的の景色は途中に妨げられて見えない。見ゆるものは綺麗てあッても目的物てない。演說は色硝子てはいけない。寧ろ空氣の樣なのがよい。空氣は眼に觸れぬ、只目的の景色のみが見える。此の如く方法の巧拙が念頭に遺らぬのがよい。方法としての演說は玆に達したら成功したのてある。が全然方法と見る譯に行かぬ節がある。此點が藝人と異る處て、頭腦が入用な譯てある。即ち內容の如何が演說の價値に關係するのてある。

前述べた通り、方法としての演說は空氣の樣に正面の景色を有の儘に示せばよいのだが、今一歩進んて考へると其正面の景色が佳くなくてはいけぬ。眞の雄辯は內容が豐かて、價値あるものてなくてはならぬ。

如何に方法として完備するとも、內容がゼロてあるか、無價値てあるならば、鳴る鐘や響く鈸の類てあらう。吾人は演說屋の空言に眞似んよりは、寧ろ學者の吶辯に學びたい。演說は大切てあるが、所謂演說使ひになッてはならぬ。

熱心と同情と思想とは雄辯家たるに肝要なものてあらう。裏家の主婦が爭論する折を御覽なさい、滔々數萬言立所に一大議論が成る、言語の抑揚から身振まて間然する處はない、議論の行り方に至ッても、自家を辯護し相手を駁擊する武者振りは堂々たる帝國議會の天狗先生等が及ぶ處てない。これ熱心なからてある。熱心な點だけは吾等の師てあるが、內容に價値が乏しい爲に之を雄辯とすることは出來ない。

之に反して、內容豐富、組織完備、文章とすれば天晴れ一廉の大論文てあるのに、講壇に立ちては何を話してるか皆目分らず、聽衆全體は睡眠

劑でも用ひた樣に、コクリ〳〵と居眠り始める、こんな演說も珍らしくない。熱心が足りないから裏家の主婦ほど元氣がないのである。聽衆に對して同情心がないから、理解せしむることが出來ぬのである。學者の演說に得てこんなのが多い。

同情は如何しても之を母親に學ばねばならぬ。片言交りの話さへも碌に出來ない幼兒にも、母親の言葉だけは理解される。話す人が聽衆になッた積りで、聽者の位置に下りて話すならば分らぬことはない。演說の價値は聽衆を離れてはゼロである。「立派な演說だけれど惜しい哉聽衆が幼稚なために理解せぬ」と言ふ批評を聞くことがあるが、此批評は當らない。聽衆を離れて演說が存在するかの樣に思ふ謬見からこんな間違ッたことを考ふるのである。聽衆に理解させ、之を動かし、其生命となり、行爲となるのでないならば、演說としての價値は無いと承知するがよい。

梅の香を櫻に持たせ、柳の枝に咲かせたやといふ樣な都々逸があるが、吾人は之を改めて、「喧嘩の元氣を學者につけて母の心を持たせたや」と言ひたい。熱心と思想と同情とは雄辯の三大要素である。

第三　練習の必要

演說は色硝子の樣でなく、空氣の樣でなくてはならぬ。方法の巧拙などは聽衆の耳目に留らないで、只其趣旨內容のみが聽衆の生命となッて遺ればよい。方法は空氣の如く自然であらねばならぬ、とすれば練習の必要は全く無い樣に見えるが、實は左樣でない。

人動もすれば自然と藝術とを全然相反するものと觀るが、是はホンの淺い方の半面に過ぎない、深く考へると二者の一致することが分る。

見よ凡ての藝術は自然に背いて進んで居ない、自然の方向に進んで居るてないか、繪畫彫刻生花など、何が自然に反進して居るか、凡ては自然を師として居るてないか、藝術を練習するのは自然に反せうとでなく、之に達せうとしてゞある。練磨の功を積まないでは自然に到達するとの出來ないのは論より證據だ、事實に徴すれば容易に分る。

字を書くにしても稽古しないで、一點でも、一畫でも、自然に自由に書き得る者は無い、試みに未だ曾て字を知らない農家の下男に筆を執らせて見よ、横棒一つでも自由に引けない、極めて窮屈な不自然なものしか出來ない。或は其が即ち自然であるといふ人があるかも知れぬが、是は詭辯である、吾等は正直に爾か思はぬ、練磨の結果出來上ッた生々と暢達してるのを自然だと思ふ。馬に乘るにしても同じこと、馬も人も自然であれば、名馬名人であらう。所謂「鞍上人無く鞍下馬無し」も自然といふに過ぎぬ。即ち馬は人が乘ッて居ると感じない、人は馬に乘ッてると意識しない程自然な狀態で、全く馬は野に、人は疊に、何の拘束なしに居る心地である。が、初めからそんなことは出來ない、調教しない馬に鞍一つでも載せようものなら、立ち上り跳ね廻りて大騒動をやる、如何して人を乘せる處でない、之を調教して一年二年と經てば、人が乘ッても平氣になる、自由に騎者の心に從ふ樣になる。騎者だとても其通り、初めて乘ッた人は固くなる、毫も自由でない、只もう土人形の樣になッて、體中の關節は破損した蝶番の樣に自由を失ふ。眼は眞暗くなり、耳さへも聞こえぬ。だから馬が歩き出すとひとりでに落ちてしまふ。それが數年間練習すると、身體の自由を失はず、心を亂さず、自然の儘に居れる樣になる、そして遂に「鞍下馬無」といふ程の自然に到達するのである。

演說だとて之に異ならぬ。熱心と、同情と、思想とだにあらば、方法は自

然てあればよいと言ふと、練習を要しない樣に聞こえるが、實は左樣でない。練習の功を積まないては、自然の域に達するものでない。初めて公衆の前、演壇に起ッた時、誰だとて平氣で居れるものでない。甚しくなると、寒くもないのに脚は顫え出す、耳は鳴り眼は暗む、勿論誰が何處に居るか、聽衆の數や種類や、そんな事が分らう筈がない。こんな騷動に驚いてか、數日間頭を痛めて考へてたことは逃げ出してしまふ。咳拂ひや、エヘン、ソノ、即ちと緒を開いて見るけれども後が續かない。語は途切れる、其かと思ふと慌てゝ早口に喋り出す、如何樣に括ればよいか、中々結論が出て來ない。聽衆の方では最早終決かと待ッてると、又思ひ出した樣に話を新たにする。幾度も終らうとしては又始める。演者は疲れ聽衆倦む。辛と終ッたけれど、何を話したのか演者自身でも分らぬものを、聽衆に分らう道理はない。初めの演說は大概こんなものであらう。それが練習を積むと、言ひたいと準備した事が自然に出て來る。身體は落つく、聽衆の種類も呑込め、人數の見當も大概つく、誰が何處邊に居るか、賛成であるか反對であるか、熱心であるか冷淡であるか、推察が出來る程に顏色が讀まれる。練習の必要は最早述べるに及ぶまい、雄辯家たらんと志す者てなくとも日頃注意して、機會ある毎に實地に演るがよい、餘り引込主義になると不具者同樣、口がきけなくなる。

序に練習に就いて大切な心得を一つ述べて置きたい。それは演說をなすべき必要ある度毎に、必ず多少の研究を遂げ、必要な題目を選ぶことである。稽古だからとて研究もしない、而も必要でも無い問題を、事々しく述べ立てる習慣がつくと、縱しや辯舌は上達しても品性が下落する、恐るべきことである。だからとて常に必要の問題は轉がッて居ない。そこで研究の要はある、研究の上で、吾等が常に看過ごしてる必要な問

題を發見しなくてはならぬ。

第二章　準備

何時でも一個の演說をなさうとするには、必ず相當の準備をしなくてはならぬ。相當といふ語は曖昧であるが、時間と費用と思考力の許す限り、充分の準備をなさねばならぬ。演說者が準備に苦しめば苦しむほど聽衆は樂に聽き得るのであるが、之に反して演說者が怠けて、何の準備もしも置かないと、徒らに聽衆を苦しむるに當る。だから準備しない演說をするのは不德義であると思はねばならぬ。準備をば間接直接の二つに別けて述べた方が便利であらう

第一　間接準備

間接準備とは一個の演說に關する準備でなうて、一般に關するものである。是は基礎的準備である。此基礎が定まッて居れば、直接準備に骨を折ることが少ない。米國第一流と言はれた雄辯家ビイチヤア氏は演說をなすに殆ど準備をしない。演壇に立つ前五分間あれば、容易に大演說の腹案成るといふ有樣であッたが、或人彼に向ッて「先生は御演說の準備に幾時間御掛り遊ばすか」と尋ねた處が、ビイチヤア先生は「四十年間」と答へたさうである。長い準備でないか、但しこれ間接準備である。彼の人格全體は此準備であッた。朝な夕な彼は準備しつゝある、基礎的準備が積んで居る上、非凡な天才であッたものだから、直接準備に勞せぬ樣に見えたのである。其實常に勞してるのだ。

「間接準備として如何なものを調べて置くかといふに、夫れ〳〵其向き〳〵の專門知識の大切なことは言ふに及ぶまい。即ち農業に從事す

る人には地味や肥料や農業に關する書籍及び實際の經驗など、商業家ならば物價金利の原則や各地の實況や、一般に渉りて研究して置かねばならぬ。演題に必要な事の外分らぬ樣では危ないものである。五つか六つの語で通譯せうとすると同じである、力ある演說が出來るものか。

尙ほ自分の得意專門とするのが何であッても、論理、心理、歷史、文學を主として、他の一般科學の梗概に通じて居なければならぬ。論理に暗ければ筋の通ッた演說は出來ない、心理に疎ければ聽衆の心に和して同情することが足りない。人情の機微を察することが出來ない。歷史文學其他の一般科學は引例のため、用語のため、常識を養ふために甚だ大切なものである。深くとは望まれぬけれども、大體に行き渉らねばならぬ。

是等は單り演說のために必要な計りでなく、文章のためにも、其他何に取りても無駄になるものでない。

間接準備は之を商家に譬へると、位置の選擇や、家屋の建築や、資本の準備である。此基礎的準備に疎漏があると、商品ばかり仕入れても何にもならぬ。是は些細な事だけれども師範學校の敎授何某と言ッた人がある。成程敎授はするが敎授てはない、敎諭である。

杳として音なしといふべきを杳としてと發音する人がある、不倶戴天を不倶載天と讀む人もある、或所では堂々たる公開說敎會で、十年許り洋行して居た學者が唯物論を唯物論と言ッて笑ひを招いたさうだ。此の如きことが一つでもあると、演說者の信用が落ちる、信用が落ちたら熱心も思想も何の役にも立たぬ、そして是等の失敗は間接準備の不足から來るのである、平素注意して怠らぬ樣にしなくてはならぬ。

第二　直接準備

一個の演説をなさうとする時に當りては、專ら其演説に關して準備をなさねばならぬ。最初は中々むづかしい。演説をするのも困難であるが、準備も之に讓らぬ。筆を執ッて見ても瞑想して見ても、參考書を引出しても、一向見當がつかぬ、只もう太息して呻るばかりである、が漸次間接準備が積むと思想が豐富になり、新しいものでも、古いものでも、入用に從ひて出て來る樣になる、以前に或演説の爲にした準備は間接準備の役をなす、といふ風で、一度よりも二度、三度よりも五度と度數重るにつれて、準備は容易くなる、容易くなると共に熟練する。最初から準備を等閑にし、勞を省き、他人が勞した糟粕ばかりを嘗めて居ると、幾年經つとも容易くならぬ。勿論熟達することはない。だから最初から其力量に應じて、時間の許す限り忠實に準備することを忘れてはならぬ。

直接準備に一定の順序はない、人に依り、又時に依り變るであらうが、

茲には著者が平常の習慣を掲げて置かう。

(一) 趣旨と演題

如何な趣旨を話すか、第一に自分を省みねばならぬ。自分の地位力量品性に不似合な事柄を喋々と述べ立てゝも何にもならぬ。例へば白面の一書生が、國務大臣でも言ひさうな一國の大事件を堂々と演じたり世界の大學者は乃公ばかりと氣取ッたりするのは、寧ろ滑稽といはねばならぬ。道德論をやるには平常から思ひを此點にひそめて居ねば、演壇に立ッた時ばかり聖人の口吻を學んだとて何の甲斐があらう？て分相應といふことを忘れてはならぬ。

第二に場所柄を辨へねばならぬ、結婚式場で埋葬の話をしたり、親睦會場で喧嘩を買ふ樣な演説をするのは勿論善くない。簡單に祝ッたり弔ッたりすれば濟むのに冗長な議論をしては其議論に價値はあると

も嗤笑を買ふのみだ。眞面目な集會で滑稽談を聽かされたり、無邪氣な會場で眞面目な演說を聽かされたり、よくあることだが愼まねばならぬ。全體の調和を破り、集會の一致を害ふ樣なことは避けねばならぬ。

第三に聽衆の地位思想力量をも顧慮せねばならぬ。今述べんとする事柄が、全然聽衆の頭に無く、遠く彼等と懸け離れたものであるならば、自分ばかり如何に熱誠籠めて述べ立てたとて、其効なきばかりか、却ッて滑稽とも見えるであらう。だから或程度まで聽衆が實驗してること、其實驗を土臺として理解し得る範圍を脫してはならぬ。さればとて全く聽衆の經驗範圍に限られて、更に新らしき方面が無いのならば、口角沫を飛ばして述べ立てる必要はない。で一部は聽衆の經驗內にありて別に變ッた說でなく、一部は經驗外にありて彼等に取り新說で、而も有益な新說で、彼等が之を過去の經驗に訴へて理解し得る樣に說けばよ

い。

之を譬ふれば立泳の體である。半身は水中に沈み、半身は水面に高く出て居る。聽衆に相應な演說はこんなのがよい。

水中(經驗內)に基礎が無うては理解させられぬ。理解しないては名論卓說も役に立たぬ。否聽衆の理解を離れて演說は存在しない。況んや名論卓說なるものがどうしてあり得られう？立派な演說だけれども惜しい哉聽衆は之を解せぬと評する人があるが當らぬ〳〵。是は聽衆の理解を離れて演說が存在するとの妄想を基とした批評である。さ云ばとて理解は全體でない、理解さへすれば宜しいと言ふのでない、一部は水面に高く出て居なくてはならぬ。即ち聽衆に益を與へなくてはならぬ、高く引き上ぐる點が無くてはならぬ、でなければ理解したからッて何にもならぬ。稽古だからとて何にもならぬ事を述ぶるのは善くない。

演說の目的は單一でなくてはならぬ。數個の目的を有するかに見える演說は、聽衆を迷はせるのみ。述ぶべきことは幾多あるとも單一の目的に集中する處が無うては、聽衆の心に徹底しない。單一なる目的を演說者の心に收めて置けば、全然失敗にはならぬ、拙くとも何物かを聽衆の心に遺すことが出來る。

趣旨既に定まりて後に苦心するのは演題の選定であらう。是は何でも無い樣だけれども、中々大切なもので、またむづかしいものである。何處の演說會に往ッても是はと思ふ程の演題を見出さぬ。時として奇拔な演題を見て、扨演說を聽いて見ると、一向題と釣合はない。日影町から昨夜求めた古服位でもあればだが、大人のフロックコートを子供が着た樣なのが多い。演題を得るは極めてむづかしい。偶には先づ題が定まると、苦もなく趣旨も立ち、立所に必要な材料集まり組織成ることがある。演說を作るのが散文書くのだとすれば、演題は正に韻文書くのに當らう。意味の外に語呂字數までも適はねばならぬのだから。

如何なのが演題であるかといふに、餘り漠然として何とも想像のつかぬのは善くない。よくあることだが、偶感一束とか所感とか何々に就いてとかいふのは演題でない。特に偶感所感などは如何な演說にだッて附けらるゝのだから、演說者の心中を洞察し得ぬ限り、演說其物に對して想像することも出來ぬ。演題未定と同じである、否未定ならば決定する時もあらうが、是は出鱈目を話すと決定してる譯であるから、未定よりも惡い。不深切無責任な演題といはねばならぬ。

演題は聽衆を引着けるばかりでなく、各自に豫想せしめて興味を增し、また理解を容易にする効用が有る、演說半ばに來た聽衆でも題が定まッて居れば全體を理解するに困難でないが、所感位では見當がつか

ぬ。演者自身は演題に依りて自ら拘束せられ、責任を明かにする。こは聽衆に對する德義である。だから偶感とか所感とか毫も拘束しない無責任な演題は善くない。何々に就いてといふのは何々と稍拘束せらるゝから前のよりは善い。

之に反して餘り明瞭な題は引着力に乏しく、詩趣が無い。正直は成功の基なり」は佳題といはれぬ。「實業之日本」式に「成功の主因如何」とすれば前のよりは善い。概言すれば「なり」は明瞭に過ぎ、「就いて」は漠然に過ぐ、けれども物に依りけりで、範圍の廣い事物は「なり」でも明瞭に過ぎる氣遣ひはない。範圍が狹ければ「就いて」としても漠然せぬ。「道德に就いて」は餘り廣いから漠然してる。「忠孝に就いて」は稍宜しい。現今の忠孝主義に就いて」といへば狹くなッた爲に善くなッた。孔子は聖人なり」は演題にならぬ、餘り明瞭であるから。「神は愛なり」は信じない人に取りて疑問であるから明瞭過ぎる恐れはない。又場合に依りて同じ演題が或は適し、或は適しないこともある。「孔子は聖人なり」は日本人や支那人やを聽衆とするには餘り明瞭過ぎて不適當だけれども、西洋人に聽かせるには不適當でない。商人の集會場で「道德に就いて」と題しても左程漠然せぬ。內容と演題は相應しからねばならぬ。通俗な話に美文的な題を附けたり、小さい演題に大きな題を附けるのは善くない。「卯花」とかきらずとか云ッても矢張豆腐の糟は豆腐の糟である。越後國築地の在にマッチ箱見たいな家がある。それに世界屋と大書してあるが、寧ろ滑稽である。子供らしい滑稽である。羊頭を店頭に掛けて、狗肉を賣ッては二度と同一の聽衆を引くことは出來ぬ。で佳題でも內容と釣合はないのは善くない。

(二) 材料の蒐集

演說の趣旨目的定まり、演題が出來たならば(演題は最後にすること

もあるが其方針に從ッて材料の蒐集に取掛らねばならぬ。材料は何處にあるかといふに、何處にてもある。料理庖丁即ち判斷の力さへあれば視るもの聞くもの何一つとして材料にならぬものはない。凡ては材料として眼前に置かれてある。だから材料を集めるには先づ手近い場所から始めたがよい。聽衆が日常目に見耳に聞き慣れて居る事物に、新らしい判斷を與へねばならぬ。料理の名人は敢て材料を擇ばぬ、如何な物でも其手にかくれば新らしい美味を持つ樣になる。御馳走を受けた聽衆は歸宅してから直に之を實地にやッて家内中で味ふことが出來る。若し之が日常見聞しない、其名稱さへも初耳であるといふ風では聞きッぱなしで、後になッて役に立たぬ。此點は如何しても吾等は新約全書のキリストに學ばねばならぬ。通俗平易誰が聽いても分る樣な事物を捕へ來りて、新らしき意義を敎へた。鳥や百合や、凡ての人が知ッて居る、併し彼等は何氣なしに看過して居たのに、キリストは森の鳥、野原の百合の生活に顯はれて居る愛の神を敎へた。一羽の小鳥、一莖の草、皆神の愛に依ッて生きて居る。此愛深い神が如何して鳥よりも、草よりも、勝ッてる爾等人間を棄て給ふものか。だから心配するな、生活難に煩悶する必要は無い。(馬太傳六章約翰傳十五章を見ると葡萄樹の比喩がある。「我は葡萄樹我父は農夫なり」「我は葡萄樹爾曹は其枝なり」神は農夫が畑の葡萄樹を培養する樣に、生氣乏しくなれば肥料を施し、蟲が附けば之を除き、全體の發達を害する樣な枯枝は切り取りなどする樣に吾曹人類を養ふと、聽いて見ると決して珍らしい材料でないが解釋は新らしい。若し夫れ進みて路加傳十五章の蕩兒の物語を讀まば如何。蕩兒に對して殆ど極り無い恩愛を顯はして居る父親は、人親ならぬ神を示したので、蕩兒は吾等人類であるといふこと、凡そ親子の情を解する程の者に

は善く解る、聖書の物語は概ね此類である、こんな風に有り觸れた事物の中に材料を發見することを第一に力めねばならぬ。それから自然界に於ける森羅萬象から得た一切の科學的智識の中に求め、進んでは古今の書籍を探すがよい、と申したからとて一回の演說の爲に、一切の書籍を研究するなど出來るものでない。尋ね探すというたからとて、彼や此や盲目探しするのでない、そこで間接準備の必要を思ふのである、少くとも間接準備で「アー何々の書にこんな事があッた樣だ」といふ位研究の端を捕へて置かねばならぬ。でないと研究せうとしても取り付く島がない。甘酒は一夜で出來るが演說はさうは行かぬ。平常自分の有として居る智識世界の埒外に一歩も蹈み出すことは出來ぬと思ッて居れば先づ間違はあるまい。

研究すべき書籍は自說を强め、確める類のを第一とせねばならぬ。苟くも不確實の點があるならば、古今に重きをなせる、特に聽衆が尊敬せるらしき偉人の言行を引用し證明することに力めねばならぬ。次に全く反對の側に居る人の說をも調ぶる必要がある。そして公平に反對者の長所と弱點とを看取らねばならぬ。類似の說に依りて自說を强めるのは言ふ迄もないが、反對者の說に學ぶ所多いものである。獨創の說は多く反對說を批評せうとする時に出て來る。外見反對說と見ゆる中に自說を强むるものが往々ある、之を忘れてはならぬ。譬へば禁酒論をやらうとする。反對說に酒は藥用として衞生上大切なものだと主張して居るならば、取りて自說を强めることが出來る、「藥用として大切なことは我にも異存が無い、藥用の語既に常用でなく、また娛樂のために漫りに用ふべきで無いことを表はして居る。酒は强き中毒性を備ふる藥物であるから、酒店から藥種屋に移さねばならぬ。そして醫師の證明ある

者にのみ少量宛賣渡したがよい」と自説を確かにする。但し反對説を調べる時に之に對して同情と敬意とを缺いてはならぬ。其主張する所に或點まで眞理を含んで居るのを忘れないで、研究の上何の點から自分の説と異ッてるといふ其分岐點を識別することが大切である。

空に考へるとむづかしい樣であるが、實際の場合になると、演説の趣旨定まれば必要な材料が續々と頭を出して來るものである。それを手帳に筆記して置いて研究すると、思ッた程困難で無い。例へば忠孝といふ我國の特長とする道德論を述べようとする。我國創立以來の歷史の大體を調べて、君臣の關係が外國のそれと異ッてる點を見なければならぬ。本來家族關係から成立してる我國では、忠孝と名は二なれど質は一、即ち忠義とは治者に對して被治者の義務と言はんよりは、寧ろ宗家に對する分家の義務であるから、大なる孝行に相當するといふ樣な議論は歷史研究から起らねば何の價値もない。忠孝論を哲學的信仰的に述べようとするならば、貝原益軒の初學訓を讀むもよからう。「凡そ人となれる者は父母之を生めりと雖、其本を尋ぬれば天地の生理を受けて生る。故に天下の人は皆天地の生み給ふ子なれば天地を以て大父母とす。尚書にも天地を萬物の父母といへり、天地は誠に我父母なり。天地は天下萬民の大父母なり。其生れて後父母の養を得て成長し、君恩を受けて身を養ふも其本を尋ぬれば皆天地の生ずる物を用ひて食とし、衣とし、家とし、器として身を養ふ、……されば人は萬物に勝れて天地の窮なき大恩を受けたり。此を以て人の力めてなすべき業は我父母に事へて力を盡すは云ふに及ばず、一生の間常に天地に仕へ奉りて其大恩を報じ奉らんことを思ふべし、……凡そ人は恩を知るべし、恩を知るを以て人とす……恩を知らざる人に忠孝なし、忠孝なければ人たるの道を失

ふ、況んや人として天地の恩を忘るゝは天地のために不孝の子也、人道の本意を失へり」それから進んて行くと、天地の恩に報ゆるには如何すればよいか、天地の道を守るにある。天地の道とは何かといへば仁てある。と此說を參考すれば形式的忠孝道に、薄弱ながらも根據が出來たのてある。今少し深く論ぜうとするなら陽明學を研究して見る。天地の奧に太虛を見出す、太虛から天地生じ天地から祖先生じ祖先から父母生る、そして父母から我は生れたといへば前說よりも深い。けれど太虛は汎神的に考へられ易いのて道德的根據として甚だ漠然としたものてある。天地の恩の通俗て解り易いのに若かぬ。最も通俗的て、そして深く高き根據を吾等は聖書の中に發見する。即ち天地の主宰者を指してキリストが我等の父と呼んて居る點てある。天地の根柢て現在の主宰者を我等天下萬民の父と仰ぐならば、忠孝道の基礎は定まッたと言うて善い。形式的忠孝道に潑溂たる生命が湧いた樣なものてある。兎にも角にも忠孝道を論ずるに當りて歷史的根據と哲學的根據とを研究するは必要てあらう。

議論の材料は出來たとしてもそれだけては足らぬ。愈〻話す場合になると具體的な事例を引く必要がある。文章には割合に此必要は少い、不明の箇所は幾度でも繰返すことが出來るし、てなくとも注意して緩くり讀むことが出來るからてある。演說は聽衆に自由がない、解らなかッたと思ッても繰返す譯に行かぬ。大切な點だから緩くり欲しいと思ッても、演說者に其要求は分らぬ。だから演說者の方ては餘程注意して文章に於けるよりも、多くの事例を引いて具體的に話すことを力めねばならぬ。てないと折角の苦心も水泡となる。

忠孝道に關しては平重盛の事蹟は逃されぬ事例てあらう。俗說のま

丶引用する時は俗説として用ふることを忘れてはならぬ。俗説でも小説でも如何な架空の説でも引用して差支ないが、是等を歴史的事實と混淆しては全體の演説の價値を下げる恐れがある。楠公もよからう、赤穂義士もよからう、中江藤樹先生もよからう、出來る限り歴史的事實を調べて、人物の背景たる其時代をも研究するがよい。すると平凡と思はる丶事蹟の中にダイヤモンドや眞珠を見出すことがある。場合に依りては不忠不孝な者の事蹟を調べる必要もあらう。

他人の演説に使用された事例を借ることもあるが、自分で原料の中から發見した程苦心して居ない代りに、如何しても最初の人が使用した樣に適切でもなく力も乏しいのが常である。産の苦痛を嘗めない養兒だから、無理はあるまい。二度の料理また再度の嫁入り見たいなものだから。處が一の物語にして此方の演説から彼方の演説へと渡り歩くのが極めて多い。是は決して賞むべき現象でない。

金言を引用して自説を強めるのはよいが、金言集から引出したのでは力が足りない。金言の背景なる人格が腦裏に鮮かで無うては、言葉だけでは力がない。道路に落ちてる書翰の一片を拾ひ擧げた樣なもので、之を書いた人は如何な人物であるか、如何な場合に誰に向ッて書いたのであるか、それが呑込めんでは其意を善く理解することも出來ない。之を他人に話したッて力がない筈である。だから話すのに必要な言行は僅かなことでよくとも、如何な人物だか大體が呑込めて居なくてはならぬ。人物を話すのには人物の背景たる時代を辨へて置く必要がある。詰る所料理屋から買ふよりも問屋から取り寄せたがよく、漁師から直接求めるのは尚ほよい。海中から捕へて來るなら更に〳〵うまいものが食へるといふ樣なものである。

材料を集めたならば、一度或は二度頭の中に入れて其處で料理し、入用の物のみ取ッて全く自分の有となし、不用物は棄てねばならぬ。そこて軈て來客に出せるのてある。

(三) 演說の組織

材料を集め判別取捨といふ料理を了ッて我有としてしまッたら、今度は適當に排列せねばならぬ。是は唯體裁のためばかりてない、折角饗應に人を招いても、料理もしない生物を出すのゝ失禮てあるのは言ふまてもないが(實際には此樣のが隨分と多い)排列方其法を得ないて、豆腐の中に肴の骨が混じて居たら、忽ち外科醫に走らねばなるまい。排列は衞生上必要なのてある。牛肉と馬鈴薯、餅と膾などを配合するのも恐らく必要から起ッたのてあらう。順序にも大體の規定がある。即ち最初御吸物かスウプを出し、終に漬物とか御菓子果實を出す類てある。

また組織は建築に譬へると、間取てある。材木瓦土其他の材料を集めて家が出來上ッたけれど、間取が出來てない。何方が入口か出口か、御座敷は何室か分らないて、來客は全然八幡不知の藪の中に入ッたと同然、といふ風では建築した甲斐がない、そしてこんな演說を聽かされることと敢て珍らしくないのだから、御互に注意して左樣なことが無い樣にせねばならぬ。

組織に依りて聽衆ばかりか、演說者も其腦力を經濟的に使用することが出來るのてある、組織が能く出來ると、聽衆は何の苦もなく全體を理解することが出來、演說者は議論をやるに重複せず、又澁滯の恐れなく、進むに從ひ確信生じて熱心になる。言語も澱まないて、平常の吶辯家も雄辯家となる。

さらば如何樣に組織するかといふに、極簡略に大別すれば緒論、本論、

結論の三となる。勿論是は本講演の趣意に從ッて、經驗の上から實用に適する樣に述べるのてある。て、長短精粗の相違はあるけれど、此三つが無いことは出來ない。

イ　緒論

緒論は門構てある。大體に簡略なのがよい。門構は通過するだけて、此處に住居するのてもなく、來客を接待するのてもない。門構は住宅に相當せねばならぬ。兎角書生の演說には辯護士や醫者の門構の樣に住宅と釣合はないのが隨分多い。例へば「學生の本務」と題して長上に從順に日々の學業に勵まねばならぬとの趣旨を述べようとする。緒論として先づ宇內の形勢を滔々と說き立てる。獨乙が如何だの、英國が如何だの、米佛露が如何だのと、或は縱に文明の根源に溯り、或は橫に世界の隈々の出來事に就いて演說者の智囊全部をさらけ出す。それから日本の歷

史や形勢に移る。そして最後にホンの數語本論の學生の本務を說く。宏莊な門構に度膽拔かれて、本邸の構造は如何に宏大華麗であらうかと想像して行くと丸木柱の堀建小屋がある樣なもので、滑稽とも何とも、イヤ早言語に絕えた有樣だ。尙ほ驚くのは此緒論が何の議論にも適合することてある。宏莊な門構は數十の堀建小屋の共同門なのだ。更に驚くのは其緒論は或は新聞或は雜誌などから、論據の如何はしいのも一切構はず集めたのだ。言はゞ其門は素性如何はしい山師連から借りて居る樣なものだ。こんなことは强ち書生ばかりてない、堂々たる學者だとても皆無とは申されまい。

緒論は極めて簡略てよい。聽衆に本論を聽かうとする熱心を與へ、また準備をなさすれば緒論の目的は達したのてある。是は最初に來客の眼に觸れる門構てあるから堅牢て淸潔てなくてはならぬ。門構まて來

た人に、内に入ッて見たいとの熱心を起させねばならぬ。同じくはいるとしても敬意を以て來る樣にしなくてはならぬ。聽衆に快き第一印象を與へ、演說者が本論に進むに都合よく道造りをしたならば善き緒論である。序に言うて置くが天氣が如何だの、風邪にかゝッたのと、田舍の辯士によく聽かされる前口上は本論に何の關係もない。あれは此處にいふ緒論ではないのである。あんな事言はぬ方が餘程氣が利いてる。

地方の青年會で風俗矯正論をやるとすれば、緒論として風俗矯正が社會のためにも一個人のためにも刻下の急務である所以を述べたらよからう「……傑出した偉人は別として、吾等普通人は殆ど境遇の子である。境遇次第で如何なにもなると言ッてもよい位である夏の小鳥は脂肪が乏しいのでうまくない、秋から冬になると軒の雀も侮り難き美味を有つ樣になる。外界の暑氣又は寒氣に調和するために小鳥自身で

知らぬ間にこんな體質の變化を來すのである。我等の身體も小鳥と同樣に外界に應じて變化しつゝある。身體ばかりでなく精神もさうである。無意識の間に住居してる周圍の感化を受けつゝある。境遇の凡てを人爲で以て何ともすることは出來ないが、風俗習慣だけは吾等が一致協力する口になると、矯正して善風良俗を植付けること、決して不可能でない。……矯正すべき二三を擧げて諸君の御同意を得たい。

「師弟道」といふ題で演說せうとするには大概左の如き緒論でよからう。……文明の進步と共に道德は退步すると論ずる人に吾等は同意することは出來ないが、されば とて現代文明に弊害の伴ふあるを知らぬでない。現代文明に伴ふ弊害の中、最大なるものゝ一は、凡てが器械的となり、團隊的となり、其結果として人格の重んぜられず、個人の認められざる樣になッた事であらう。而して之がために古來我國美風の一たり

し師弟道は其跡を絶ッた。昔は笈を負うて百里を遠しとせず、良師の門に集まる者が多かッた。富田高慶の二宮尊德に於ける、熊澤蕃山の中江先生に於ける即ち好例である。然るに今や如何、青年は唯資格ある學校を選ぶに急、教師の如きは誰であらうと殆ど問ふ所なき有樣である。教師も亦職責を盡すといふに止まりて、個人的關係あるのでない。昨日甲校より來り今日乙校へ去るとも意に介する所でない。願ふは唯自己の榮達である。諸君、此の如くにして教育の効果を望まれませうか、人道の美を濟す所以でありませうか。吾等は徒らに高言放論これ事とするものでありませぬ、着實に師弟道振興の策を講じたいと思ふので、乃ち諸君の靜聽を請ふ所以」。

ロ　本論

本論は家にすれば本宅である。家に間取が必要である如く、是にも段分けが必要である。大きい家が唯一間であッては御寺ならば兎も角、住宅としては適せぬ。然ればとて細目に過ぎてもよくない。小さい家にホンの體裁を作る外に用のない樣な二疊三疊の小室を、ヤレ奥座敷だの二の間だの、松の間だの、梅の間だの、女中室だの、子供室だの、それから寢室食堂何々と分け整うても是れ亦住宅に適しない。要するに本論は大別に過ぐれば理解するに難く、細別に過ぐれば詩味を失ふものであるから、普通のならば三分四分を度とし、長く複雜なものになると、更に之を細別した方がよからう。

分たれた段と段とは互に關係し連絡し相助け相補ふことも多いが、全く別々の方面から結論に集中することもある。結論を河口とすれは、大小の枝流が或は三十里或は五十里百里を隔てゝ本流に合し、洋々たる大河を成して海に注ぐのもあり、又大小各種の小川が河口で一つに

なり海に注ぐのもあるといふものであらう乎。

各段相關聯して結論に向ふ場合に於て、強弱高下の別あらば(是はあるに違ひない、又無うてはならぬ)強く高きを後にし、結論に近く配せねばならぬ。すると前論は後論の準備をする、かくて結論に達する時は聽衆をして成程と首肯せしめぬことは稀であらう。過ッて強く高きを初めに配する時は、精神の準備が出來て居ないために理解せしむることが出來ない。縱し理解せしめたとしても、低く弱き議論を後で聽いては心に弛みが出る。弛みが出ては折角の結論も無効になる譯である。

「風俗矯正論」の例を續けて見よう。

「第一段時間の確守、諸君、矯正すべき風習の第一は時間を確守するやうにする事であるまいか。由來我々は時間の觀念に乏しい。成程光陰に關守なしとか、矢の如しとか、諺はあるけれども、事實に於て見ることが

少い樣です。田舍になるほど益〻ひどい。買物に行くと田舍の店では三十分間位御客を待たせて平氣であるが、賣買する段になると一厘一毛でも値切らうとする。負けまいと、するる斯うして一時間位經つ。賣手買手共に値段には痛く顧慮するが、時間に對しては無頓着である。フランクリン氏が店の番頭をして居ッた頃、買人が來て値段を尋ねた。餘り高いと思うてか躊躇して買はない。去りもしない。再び三度値段を尋ねると其度毎に値段を上げた。客惟みて理由を聽いた處が、それは時間の代てすと。如何です、こんな風に時間の貴いことが理解されてあるでせうか。無い、少くとも足りないです。我等新日本の青年として世界の舞臺に立たうとする者は、幾多の故障を排して、此弊風を打破しなくてはならぬ。

各人各個毎日の行動に規律をつけ、働く時と休む時とを明かに區別し、起床就眠に節度ある習慣を養ふことを先づ初めに學び、力めて實行

せねばなりませぬ。これ健康上經濟上また道德上甚だ肝要であります。

（此邊例証を擧げて委しく話すがよい）

若し夫れ家族の一員として之を考ふるならば、一層大切なことが分る。一家は小さい團體であります。規律の上に銘々が立たぬならば其運轉は妨害せられる。一人の朝寢坊が居て御覽なさい。皆が迷惑するに違ひない。子供の學校時間は後れる、主婦の後仕舞も後れる。而して遲く起きた主人が、ヤレ御飯が冷えたの、御汁がまづいのと小言をいふ。一家の平和は破れる、叱ッた者も叱られた者も、傍て聽いた者も、凡て不愉快で一日を送る。こんな風で業に勵まれるものであるまい。晩になると友人が來る、黑白の戰爭が始まる、十二時も過ぎ、一時になり二時になッても バチリ〳〵と音は斷えぬ。家內中其爲に寢る譯に行かぬ、主婦や女中やは今か今かと客の歸るを待ちながら坐して頻りに櫓を漕ぐのもあれば、轉寢に風を引いて嘘するもある。翌朝になると皆日の出を知らぬ。朝寢するとて主人は例の小言。こんな風では家は榮ゆるものでない。主人は軍隊の正面行進ていへば嚮導で、側面行進ていへば先登兵であるから、之が勝手に早く歩いたり、遲く歩いたり、右や左に反れたりしては他の者はたまらない。主人に限らず一人でも落伍者が出來ては隊伍は亂れる。一家揃うて時間を正しく守ることは如何に大切であるか、是で明かであらう。

モット大きな團體になると、反ぼす害が從ッて大きい。各種の公會に例へると、茲に百人集まるとする、正直な人は時間通りに出席する。九十九人正直な人が居たとすると、九十九人は定刻に集まッた。が一人足りない、大切な此會の主人公とも見るべき一人が足らぬ。そこで開會する譯に行かぬ。皆待ちあぐむて一時間も經ちて漸く揃うた。（實際には二時

間も三時間も待つことがある。遂に揃はないで流會することさへある。市會や縣會にさへこんな事がある。實に慨嘆の至りでないか)自分一人の爲に九十九人が一時間づゝ待ッたとすれば、自分は九十九時間を盗んだ譯である。金錢に積られない九十九時間を盗んだのである。然るに盗まれた者も盗んだ者も平氣であるを見るに至ッて、吾等は驚かざるを得ない。我れ思ふに物品の盗まれたのは、盗まれた方にも油斷があッたのだから過失がないでない。其上法律上の責罰が伴ふのだから、多少其罪は輕い。時間は盗まれた方は律儀正しい正直者で、何の落度もない。律上法の責罰が伴ふといふ譯でも無い。從ッて道德上其罪重いと言はねばならぬ。御互に矯正したいものであります」の意味をモット具體的に話せば尙ほよい。

「第二段、禁酒禁煙」是は經濟、衞生、道德の三小段に更に分けたがよから

う、道德は前二者をも含むもので即ち不經濟も不衞生も自他に對する不德義である。で道德を後に論じたがよい。經濟の點は誰にても反對のない事であるから强く論ずるが程のことはないが、實際の統計を示したならば一層深い印象を與へるであらう。けれど不經濟とは費消の點からのみ論ぜられるものでない。如何に莫大の費消をなしても、それだけ益があるならば不經濟でない。で第二小段の衞生問題に移らねば、第一小段の議論は確められない。そこで第二小段に移る。衞生問題を論ずるに當りては自分で此方面の研究を爲して置くことも大切であるが、醫學者研究の結果を引用するもよい。安藤太郎氏の如き元大變な强酒家であッて、今熱心な禁酒主義になッてる人の經濟談を爲すのもよい。がモット力ある事柄は聽衆が熟知してる中に適例が少くないから、それを引證することである。必ず聽衆を戰慄せしむるであらう。進んで第

三小段道德問題に移る、不經濟と不衞生とは經濟衞生問題に止まらぬ、道德問題である。即ち不經濟不衞生は自己に對し、家族に對し、又社會に對して不德だと論ずる。吾等の良心は多少之を意識して出來ようものならば此惡癖から脱したいと望んで居るのだから、其點を補ふことが、大切である。其事已に不德であり、其結果また大なる不德である。道德的勇氣あらむものは、萬の故障ありとも斷乎として之を排して禁酒禁煙を實行せねばならぬ。只今より實行せねばならぬ。との意味を具體的例證を擧げて述べたならば、其目的を達するに近からう。

「第三段男女關係」人間一生の幸福、家庭に於ける團欒の樂に越ゆるはあるまい。家庭の幸福は清い男女關係に根ざす。男女相愛する元これ天性に基くもの、擧げて罪とするのてないが、茲に一歩を誤れば、愛の天使は猛惡なる惡魔と變る。凡ての罪惡は人の自由を奪ふ。一度落つれば底なき谷に陷ッた樣に、容易に出て來ることはない。凡ての罪惡は中毒性を有して、人を奴隷とするものてある。が男女關係程中毒性の大なるものは無い。相互關係者が受くる禍は言ふ迄もなく、其結果として現はれ來る不幸は量ることが出來ない。家庭は紊れ、子女敎養の道は廢る。而して害は其一家に止まらぬ。と樣に第三段中の序論として述べて、それから二三の惡しき實例を擧げる。然る後善き實例を擧げる。そして婦人と等しく男子も亦節操を守ることの如何に幸福なるかを說き、單に幸福なる計りてなく、吾等の良心は淸潔を望むものてある、と聽衆の心の中から改悛の力が湧き出づる樣に、演者は只其力を引出す樣に話したならばよからう。

以上述べた第一段、第二段、第三段は互に關係する所は無い。各〻別々に結論に向ッて居る、否其本論の中に結論をも含んて居る。此の樣なのは

嚴密な意味で組織的といはれぬ。が此話し方は容易である。初めはこんな風にやるもよからうと思ふ。第二段中で三小段は互に關係して居る。餘り長くなるから師弟道の例を省くことにせう。

ハ　結論

結論は全體を總括する扇の要であるから、力めて簡略で明晰で、而して鋭利でなくてはならぬ。言はゞ短刀一閃、敵の咽喉に迫り、最後の留めを刺すのである。留めを刺すのはうまく行かなかッたものださうな。餘程修練のある武士でないと、臆せず慌てず從容自若として、法式通りに留めを刺すことは出來なかッたものださうである。結論のむづかしいのも之に勝るとも劣りはせぬ。留めは殺せばよいのだけれど、結論は相手を生かし、活力を與へ、啻に首肯せしめるばかりでなく、直ちに其說が實行とならねば、演說は成功したとは言へぬ。そして其が繫りて結論の如何にあるとすれば、結論の大切なことは留めの及ぶ所でない。

「風俗矯正論」の例で曰ふと第一段第二段第三段共何れも離れ〳〵に結論を有ッて居るのだから、事新らしく結論する必要はない。聽衆の事實にあてはめることが肝要である。聽衆は成程成程と聽いて居る。成程ではあるけれども他人事として聽いて居る。時に話頭一轉「諸君は如何」と喝破し、善人の事蹟を聽いて喜び、惡人の事蹟を惡む我等の心は、良心、の輝けるを證明するもの、此良心の指揮に從ひ、我等は今日只今より實行せうでないか。我れ先づ實行し、次で他に及ぼし吾等の町村擧げて美風良習に從ふことゝならば、我等の功績大なりと言はねばならぬ。などゝ實行を促したらば善からう。今一段進んだ結論をせうとするならば、前述の三段を總括して惡風惡習の根柢を探り、唯一の本源を求めて示したならば、識者は反省するであらう。併し是は普通の人には理解され

まい。前者の易きに若かぬ。

本論が餘り長くなッて聽衆が記憶するに困難な樣な場合になると、爲方がないから結論で簡略に再説して括りをつけることもあるが、是は事實已むを得ぬ時に限る。

結論の長きに失するのは其弊の及ぶ所緒論や本論やの長きより幾層倍する。最早終結かと思ッてると考へ出した樣に又始まる。三度四度斯うして三十分も過ぎてヤット終る。こんな風では折角の苦心も水泡に歸する。名論卓説もあッたものでない。聽衆の心から緒論や本論中の佳言名説は消え失せ、散會後までべん〳〵だら〳〵した結論のみが頭に遺り、演説といふものは詰らぬものだと思ふ樣になる。之に反して結論が簡潔明快であッたならば、少々な缺點が本論中にあッても目的を貫徹するに支障は無い。緒論や本論を全然理解しない人でも結論だけ

理解すれば大體の趣旨目的を推知することが出來る。死すべき時に死せざれば死するに勝る耻辱ありとの語を移し來りて、吾人は止むべき時に止めざれば爲さゞるに勝る弊害ありと申したい。吳々も簡潔明快、サッと引揚げることを忘れてはならぬ。未練男の心を後に遺す樣で、思ひ切りが惡くては善くない。

第三章　登壇

從來述べたのは凡て準備であッた。是からが本舞臺である、實戰である、血湧き肉躍らざるを得ない。

第一　草稿携帶の可否

準備は以上述べた通り爲さなくてはならぬが、之を詳記して登壇の

時携帶するか(余思ふに全く書かぬ譯に行かぬ。全く書かぬのは決して腦力の經濟的使用法でない是は考へ物である。詳記したのを携帶すると、それに心を奪はれて演說に力が入らぬ。此方法で熟練して居る二三の人は別として、普通の人の朗讀演說は聽きよいものでない。熟練して居る人は此方法でなくては一切出來ぬ。即ち草稿を除けば啞者となる是でもいかぬ。全然携帶せぬとしたら如何か、座を見て法を說くといふ樣な應用は利く、拘束がないから自由で大膽で活氣のある演說が出來る。けれども餘計な暗記に頭を使ひ、試驗場に出る學生の樣に心中穩かならぬ節もある。順序を違へて慌てることもある。語るべかりし大切な事柄を拔かして後悔することもある。並べて陷り易い短所を擧ぐれば、言葉の重複、論旨の淺薄にして支離滅裂、そして全體に冗漫に流れることであらう。だから大概の場合には筋書をなし、それに必要な言語、人名、地名、年月日、數量などを略記して携帶するがよからう。斯樣に習慣を養ッて置くと偶には朗讀演說も出來るし、全く草稿なしにでも出來る。

如何な場合に詳記した草稿を携へて朗讀演說をせねばならぬかといふに、上位の人々に謹みて申し上ぐる時は禮儀上左樣したがよい。莊嚴な會場では讀まぬ迄も禮儀上草稿を携帶したがよい。夫から聽衆に對し演說者の一言半句が非常な利害關係を有する場合、こんな場合には聽衆は耳を聳てゝ聽いて居るのだから、方法よりも實質が大切である。帝國議會に於ける大臣の朗讀演說は恐らく此理由からであらう。演說の內容に關してこそ、非難も攻擊もあれ、爲振りを責める者は無いのだから、多くの大臣方が朗讀せられるのも無理はない

第二　姿勢

心を落着けて自然のまゝてあるがよい。登壇の折の歩き方にしても左樣である。日頃小きざみに歩く人が此時に限り、昔の役者が舞臺に出た時の樣にのさばッて歩るくのは演說者が旣に凝り固まッて居る徵である。自然であれ、凝るな、是て姿勢は十分である。

演壇に上ッてからも只もう自然のまゝ平氣で落着いて居られるならばそれてよい。體が凝ると兩手が邪魔になッて置き所がない。頭が氣がゝりになる。ナニ心配が入るものか兩手は左右に、頭は首の上にチャンと落着いて居るのだから、取脫して簞笥の引出に入るゝ必要は無いのだものをだが實際氣がゝりなものてある。それが精神が落着いて平氣で居ると、話に伴うて兩手が活動を始める。頭が表情の加勢をする。脚部までが活動する(實は此奴に餘り動かれては困ることもある)斯樣に四肢五體が命令せずと動き出して言語の足りないのを補ふ。平氣て居

れば身振りが出來るのてある。身振の御稽古は入用て無いと吾輩は思ふ。

登壇後初めに輕く一禮し(餘り馬鹿丁寧なのは興業師見た樣で滑稽てある)そして全聽衆を靜かに見廻し、人數、種類、出來るならば誰が何處に居るといふことまて呑み込まねばならぬ。すると胸の動悸も鎭まり、言語が澱みなくスラ〳〵と出るものてある。

上體の姿勢の基礎は兩脚であることを忘れてはならぬ。兩脚の自然の姿勢は樂に「氣ヲ付ケ」即ち不動の姿勢をすることてあらう。兩脚共眞直に立ちて上體の重量を平均して支へるのだから之よりも自然の姿勢はあるまい。凝らないて此姿勢を取ることが大切てある。或場合には此姿勢を崩すもよいが、又元位に復せねばならぬ。兩脚をコンパスの樣に踏張ッてる人をよく見受けるが見ッとも善いものてない。

また片脚に體の重量を托して「休メ」の姿勢を取る人がある。時偶には是も善いが、此姿勢では上體が一方に傾いて居るから威嚴が表はれない。何というても動かざること山の如きは名詮自稱、不動の姿勢に勝るものとてはない。

繰返して言ふが、凝らないで兩脚の如きも強く密着するに及ばぬ。樂に平氣で、此姿勢を保つがよい。新兵の「氣ヲ付ケ」の樣に窮屈では三十分も立ッて居られない。

第三　心構へ

或人は斯う曰ふ。演壇に登ッたら人の前に立ッてると思ふな。棒切の前に立ッてると思へ、頭から人を呑んでかゝれと。物に臆せぬ爲には成程此心得はよい樣だ。併し吾輩は之に贊成が出來ない。吾輩の思ふ所では、演壇に登ッたらば尊敬すべき人物の前に、自分の良說(少くとも斯う信ぜねばならぬ)を述べるのだと、聽衆に對しては尊敬と同情を失はず自己に對して、强き確信を有しないでは眞摯な演說は出來ない。賣り語に買ひ語である。輕蔑は輕蔑を產み出すの外はない。聽衆の意見と反對の說を述べる時でも敵の前に立てるといふ心持はよくない。喧嘩腰は善くない。吾人は曾て聽衆の中にノー〳〵の聲を聽き、益〻勇氣を奮ッて喧嘩腰になり、辯じたことがあるが、今後悔を以て記憶して居る。敵であるならば演說を聽かせる必要はない。自分と同じ心に爲したいために演說するのならば、何處までも聽衆に對して、敬意と同情とを失ッてはならぬ。聽衆が反對であり、又幼稚であるならば、演說者は一旦聽衆の立場まで足を運ばねばならぬ。即ち聽衆の心持になり、彼を誘ひ出さねばならぬ。結論の時でも聽衆に向ッて凱歌を奏するのでなく、聽衆と共に

凱旋する心地が大切である。彼我共に戰勝者で敗北者は何處へか逃れ去ッた異說である。敬愛する我骨肉が異說の擒となッて居ッたのを、內外相應じて取り返したといふ心持である。

第四　言語

姿勢と共に言語は大切なものである。初對面の人を如何な人かと見るには、容貌服裝擧動に依るが、其言語を聽くと尙ほ善く解る。服裝だけならば速成で紳士になれる。服裝一つで容貌も擧動も紳士らしく見えぬでもないが、さて俄かに模倣されないのは言語であらう。一言二言交へる中には、如何な程度の人か直ぐ分る。演說でも同じ道理。

第一に注意すべきは聽衆が解し得る言語を使用することである。言語は思想の運搬器であるから、聽衆に理解されないでは何の役にも立たぬ。無暗矢鱈に漢語を使ッたり、近頃は又飜譯語の半可通なのを頻りと振り廻す人がある。「私が彼女を訪ふべく彼地に往ッた時に」と彼が彼女がなどの代名詞を亂發したり、可く〳〵を濫用されては老人や婦人には分らないだから古來使用し來ッた純粹の日本語を豫て學んで置いて、日本語で話す樣に力めねばならぬ。日本語を學ぶといへば可笑しい樣だが實際の所日本語を善く知らない者が多いのぢや。

第二に誇大な言語を濫用せぬ樣に注意しないと全體の信用を損ふ。大變、非常、最、偉大など無暗と飛び出されては聽衆から輕蔑せられる基である。朝から晩まで怒鳴ッてると、慣れッこになり、アヽ又始まッたといふ風で意にも介せぬ樣になる。何處の家でも餘りヤカマシ屋の親爺殿はこんな待遇を受けて御座る樣だ。今日手にした或雜誌に新聞記者某氏著述「水戸黃門」の廣告がある、廣告文の初めに曰く「千古の偉人水戸

黄門云々」形容し得たる哉千古の偉人とは、釋迦、孔子、基督、ソクラテスの如き或は偉人と稱せられうが、千古を冠するためには今一度選ばねばならぬ。最も強度の形容詞を愼みて使用するのは聽衆のためばかりでない。自分の品性に取りても少からぬ關係がある。

第三に語句を短くすることが大切である。文章ならば此動詞の主格は孰れと容易に分るが、話てあると左樣は行かぬ。文章だッても句切の長いのは賞めたものでない。必ずとは限らぬけれど、先づ拙文と言ッて差支ない。有名な獨逸の哲學者カントは拙文家としても有名であッた。或時自分の著述を世に出した折の事、一學生に吾輩の著書を讀んだかと尋ねると、學生の曰く「讀んだけれども指が一本足りないので解りません」と斯樣である。句切が大變長い、一の主格から廣がッて、それからそれへと複雑な關係が生ずる。で記憶して居られないので、指て以て此動詞の主格はこれ、此方のはあれ。と文法上の關係を辿ッて押へて行くと十一本指が無うては足りないのだと。演說にも此類がある。ありますが、ありますけれども、といふ風に「が」「ども」「から」で結び付けて、中々「ます」「ある」「です」の句切が出て來ないのが偶にある。思ひ切ッて句を短くする事に力めるが、話し易く亦解し易い「ますけれども」と言ふ場合には「ます」と一應句切をして、次の句に「けれども」と說き起したがよい。

序に語尾に就いて一言したいが、語尾は特別に明確（はっきり）と力を籠めて發聲したがよい。語尾不明瞭のために意味を解されなんだり、或は反對に解されたりすることは敢て珍らしくない。語尾に同語を習慣的に連續して用ふる人があるが、打聽きの惡るいものである。或演說家は「あります」の連發をやる。數ふる事も出來ない「何々であります」「ありますのであ

ります」とやられては折角の名論も零になッて了ふ。

第四に演說に關係の無い斷り文句を前後に長々しう述べ立てるのはよくない。小學生徒が手紙を書く時には「甚だ御大切な書籍長く拜借仕り難有御禮申上候本日迄に漸く讀み了り候間別冊返上申上候」とすれば十分であるのに、是では餘り短い、物足りないと思うてか、春暖の候とか、何とか本文よりも長い口上を並べる。

演說の場合は前後の御斷りは全く入らぬ。數名の辯士と共にやる時など特別にさうである。詰らぬことに時間を費すのは失禮と言はねばならぬ。

第五　音聲

音聲は演說に大切なものであるが、天性に關係する部分は茲には言はぬ(天性とはいふ條訓練の結果高い調子が低くなり、小さな聲が太くなッた例は現に幾らもある)

音聲の餘り大きいのは聽衆の注意を集めることが出來ない。餘り小さいと後方に聽こえぬ。如何位を程度にするかと言へば、後方に聽こえさへすれば善いのであるから、最後の席に居る人と談話する積りで程度は分る。話の意味次第で大小とも變ずるのは差支ない。

音聲の强弱は意味次第である。全身全力を以て話して居ると、自然內容に伴うて强弱はつくものである。巧妙なる表情も態とやッては俳優の表白と同じで眞摯を缺く。特に何の意味もない接續詞の「而して」などに力を込めて發聲するのは寧ろ滑稽である。話中に己が身を投じて置くと、表情は期せずして出來る。心配には及ばぬ。

以上簡略に演說の爲方を述べたが、實際の場合に幾分の効果を見る

であらう、是で盡したのでは無いけれども、是だけすらも承知しない人が少くないのだから、而してこんな種類の書物もまだ出來て居ない樣だから、諸君に取りて有益に違ひないと確信して御話した譯である。

演說講演說教法 終

明治四十三年七月十五日印刷
明治四十三年七月二十日發行

演說講演說教法
定價金貳拾錢

著作者 井口彌壽男
發行者 山縣文夫 東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地
印刷者 藤本兼吉 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 株式會社秀英舍第一工場 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

不許複製

發行所 東京北豐島郡巢鴨町上駒込廿番地
電話(長距離加入)下谷四百三十八番
內外出版協會
(振替貯金口座東京三百五十五番)

●●●佐々木邦譯述●●●

滑稽と趣味とのの無盡藏

いたづら小僧日記	定價金四拾錢 郵稅四錢
續いたづら小僧日記	定價金參拾錢 郵稅四錢
おてんば娘日記	定價金參拾錢 郵稅四錢
法螺男爵旅土產	定價金貳拾錢 郵稅四錢
ドン・キホーテ物語	定價金四拾錢 郵稅四錢
各國滑稽小說	定價金五拾錢 郵稅六錢

元版　東京巢鴨町駒込二十番地 振替貯金東京三百五十五番　內外出版協會

全國都鄙の大小圖書館——學校附屬の文庫——
青年子弟を有する家庭——何れも此好著を缺く可からず

井口丑二編著

日本自助論	全一冊 定價金壹圓 郵稅十二錢
續日本自助論	全一冊 定價金七拾錢 郵稅八錢
二宮翁傳	全一冊 定價金八拾錢 郵稅八錢
報德教要領及び其の處世法	全一冊 定價金四拾錢 郵稅六錢
報德物語	第一編金貳拾錢 第二編金參拾錢 郵稅四錢宛

元版　東京巢鴨町駒込二十番地 振替貯金東京三百五十五番　內外出版協會

松本赳 編著

基督

再版

正價定價金壹圓貳拾錢
郵稅十二錢

護教批評

世界三聖傳の一として『基督』出てぬ。著者は誰ぞ。蓋にシエンキキッチ作『何處に往く』を譯し文名を知られたる松本氏なり。至聖基督を傳せんとせば、著者先づ深く彼を渴仰し憧憬し、彼の人格に觸れ彼の精神を攝取せざるべからず。若し著者にして此の域を去ること遠からんか、其の材料は如何に豐富なりとも、其の評論は如何に犀利を極むとも、是れ死せるナザレの一工匠を畫くに過ぎず、活ける基督の胸臆に宿れる神識靈覺は爲ぞ此の如くにして傳ふべけんや。著者松本氏は弱冠にして信仰の門に入り、諸先輩に私淑して心靈上修むる所淺からず、まず〳〵基督教の堂奥に趨せんと欲して潛心基督の生涯を研究し、其の結果を發表せるもの本書即ち是れなり。著者の如きは洵に基督を傳するに適せりと謂ふべし。著者は重もに材料をディン。ファラーの『基督傳』及びデビッド・スミスの『基督在世の時』に採り、簡潔なる筆を以て趣味深く記述せり。我が邦未だ完全の基督傳あらず、竹越氏の『基督の傳記』海老名氏の『基督傳』ストーカー、ニコル、ブローダス、ルナン等の譯書等稍々見るに足るものありと雖も、繁簡宜しきを得て中正不偏なるもの〻少きを憾みとす。此の時に當り本書の出版ありしは、基督教文學の爲めに慶賀せざるを得ず。惟ふに基督傳の研究は、直ちに基督教の中心に接觸し、堅實なる信仰を樹立するの基たるべし。吾人は此の良書を世に推薦するに躊躇せざるなり。

版元 東京振替貯金口座 郵便區 東京 鴨巣 中山 邸内 内外出版協會
染井 第三 傳百五十 縣十五番

最も平易に最も精しく最も興味多き聖書物語

舊約聖書物語

シエルエンドル原著 宮崎八百吉譯

(定價金六拾錢 郵稅六錢)

歐洲の文學を修むる者は必ず先づ聖書殊に舊約全書の話を一通り知らざる可らず、否らざれば歐洲文學の本源を窺ふを得ず。其中の物語は單に宗教の一點に止らず、人事百般の經驗と人情の機微を穿ち居れば、其深遠なる寓意と天來の教訓は、修身處世の秘訣を悟るに益あり、虛心平氣に考ふれば、四洋の文學にこれほど興味あるものはあらじ。本書は元來童蒙のために書きたれば別段宗教臭くもなく、何人が讀みたりとて毛嫌ひするの患なし。其譯文に至てはさすがに明治の一文士として、また嘗ては監牧の職に就きし經驗ある人の事なれば、能く原文を咀嚼し、流麗の筆致讀者を飽かしめざる概あり。四六判三百二十七ページの大册なり。……(中外英字新聞)

この書は、皆樣が御承知の舊約全書のお話を、やさしく書きなほしたものです。もと、米國の少年少女に讀ませるために書かれたものを、更に日本語に飜譯したものです。文章は流麗で、少年少女の解し得るやうに譯されてあります。而もこれは、基督教信者の好讀み物であるばかりではなく、その他の少年少女のためにも、非常に面白くて有益な書物です……(少女世界)

版元 東京振替貯金口座 郵便區 東京 鴨巣 上町 駒込 中山 邸内 内外出版協會
東京 巣鴨 東金 三百五十 二百五十 番地 番

大屋德城著

宗教大系

定價金四拾錢　郵稅六錢

世界大宗教の研究

本書は世界三聖傳『釋迦』の著者が、一般人士の知悉し置くを必要とする世界の主なる各宗教の要領を平易に簡明に記述せるもの、一讀能く儒教、道教、波羅門教、佛教、波斯教、猶太教、基督教、回々教等に通ずることを得べし。前の文部省普通學務局長白仁武氏本書に序して曰く、

德城大屋君は余と同郷の人なり、哲學を以て聞ゆ。夙に哲學を修め、業已に成りて研鑽尚ほ怠らず、造詣頗る深し。頃日『宗教大系』を著はし、來りて之を余に示す。余受けて之を讀む、行文平易にして、指導切實なり。凡そ宗教の事たる、古今說き得て明瞭なるもの甚だ少し。況んや說き難きを俗解して平々坦々大道を直行する此著の如きもの、余未だ曾て之を見ず。蓋し君學に篤く、行に勤む、自ら得る所あるにあらずむば、焉ぞ能く如此を得んや。讀者世界の大宗教を概觀して心に得るあらば、著者の喜び可知矣。

と。以て著者を知り、以て本書の價値を知るべきにあらずや。

版元　東京巢鴨町上駒込二十番地　振替貯金東京三百五十五番　內外出版協會

米國　サーストン原著

『報知新聞』記者　碧川紅雨譯

修養小說　少年僧正

ロクロス綴美本　定價金壹圓　郵稅八錢

いたづら小僧の日記を讀みて笑ひ興じたる者は更に此書に依りて眞面目なる少年の活動に學べ。親も無く家も無く、夜は塵箱に眠れる漂浪の少年、一たび其の不正に得たる金を以て一少女と其の弟とを救ふに及んで、彼の心は漸く覺めかけた。次いて一僧正を欺いて其の家を逃れ出づるに方つては、彼は既に全く生れ變つたものとなりて其の家庭に居ること數旬、良心の苛責に堪へずして其の家を逃れ出づるに方つては、彼は既に全く生れ變つたものであつた。而して少年は其の小なる身を以て僧正の爲す所に倣ひ、奮然として世の罪惡と貧苦とに惱める下層社會に、溫き光と新しき希望とを敎へ始めた。嗚呼此の少年の心！、此の少年の覺醒！吾等の小さき盜人の子は、如何にして赤手社會改良の大事業に力を盡さむとするか、本書は實に此の事を語る活きたる一篇の小說である。原書の名を "The Bishop's Shadow" と云つて、最近歐米の家庭に於て最も興味ある清新の讀み物として此の書の如く歡迎を受けたものは無い。我が國の總ての家庭にも同樣此の譯書が入つて行くやうにしたいと云ふのが譯者の念願である。

浮薄淫靡なる小說に親みて自らを汚さんよりは此の眞摯なる良小說に依りて品性の修養を爲せ

版元　東京巢鴨町上駒込二十番地　振替貯金東京三百五十五番　內外出版協會

スマイルス五大著書

本讀好の養涵性德▲訓教大の實着健穩▲

力動原の化感士名▲範模活の營自立獨▲

職分論
金壹圓五拾錢
小包郵稅拾貳錢

品性論
金壹圓五拾錢
小包郵稅拾貳錢

勤儉論
金壹圓貳拾錢
小包郵稅拾貳錢

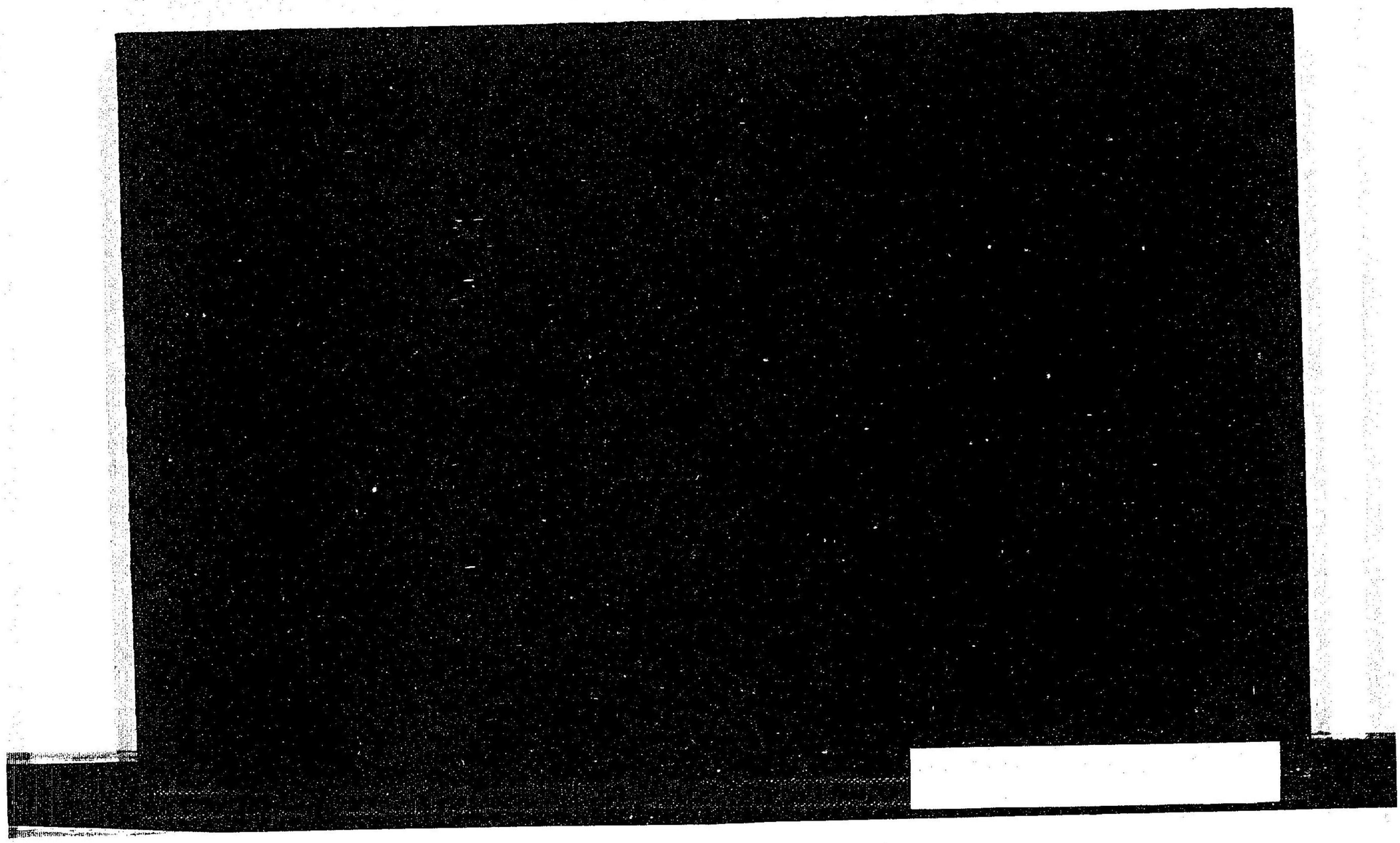
自助論
金壹圓五拾錢
小包郵稅拾貳錢

勞働論
上卷五拾錢
金發行
郵稅六錢

版元　東京巢鴨町上駒込二十番地
振替貯金東京三百五十五番

內外出版協會

264
161



特19
870

演説講演説教法

国立国会図書館

076662-000-9

特19-870

演説講演説教法

井上　弥寿男／著

M43. 7

DAB-0014